

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会(第41回)

日時：令和7年7月7日(月) 13:30～15:30

場所：西の丸会議室

次 第

1 開会

2 あいさつ

3 議事 ・二之丸庭園の修復整備について

<資料1>

4 閉会

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会(第41回)出席者名簿

日時：令和7年7月7日(月) 13:30～15:30

場所：西の丸会議室

(敬称略)

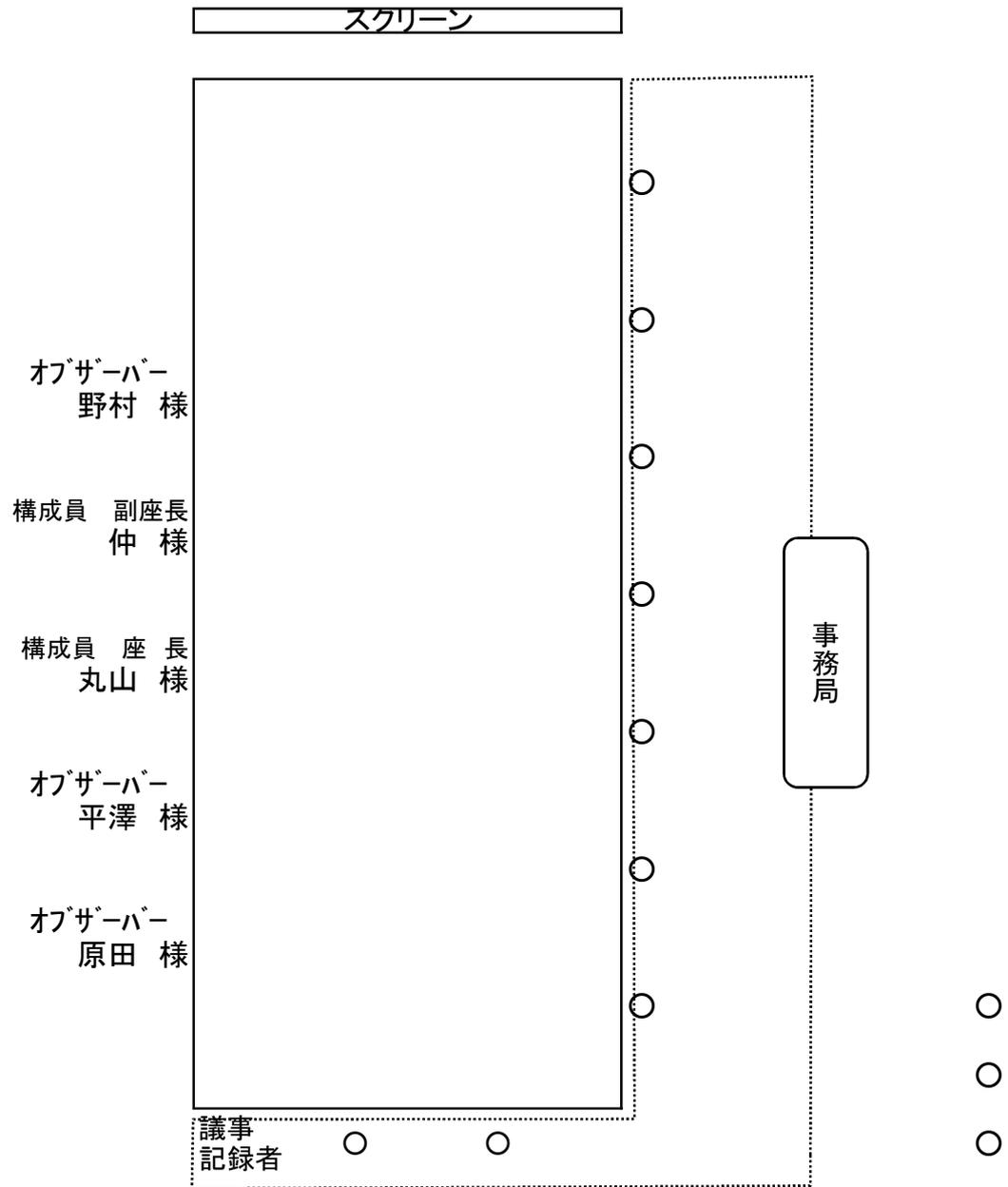
■構成員

氏名	所属	備考
丸山 宏	名城大学名誉教授	座長
仲 隆裕	京都芸術大学教授	副座長
栗野 隆	東京農業大学教授	リモート

■オブザーバー

氏名	所属	備考
野村 勘治	有限会社野村庭園研究所	
平澤 毅	文化庁文化財第二課主任文化財調査官	
原田 早季子	愛知県県民文化局文化部 文化芸術課文化財室 技師	

庭園部会 第41回 座席表



二之丸庭園の修復整備について

1 余芳周辺の整備

余芳周辺整備にあたり、枝折戸、袖垣、州浜状遺構、雨落ちについて検討した。整備計画書の基本方針にあるとおり、北御庭については『御城御庭絵図』に描かれた空間性を回復することを基本とする。また、整備計画書の「第2章計画地の概要 第2節沿革と史料 第2項参考史料の概要」にあるとおり、同時代に描かれた『尾二ノ丸御庭之図』は、『御城御庭絵図』と異なる箇所が見られるため、2つの絵図を比較検証することで考察を深める。また余芳と思われる第14代藩主慶勝によって撮影された古写真についても史料として取り扱う。

(1) 古絵図

- ア 御城御庭絵図／作成年代：文政年間（名古屋市蓬左文庫所蔵）（図1-1）
第10代藩主斉朝により改修された二之丸庭園を詳細に描いた絵図で、文政年間に作成されたと考えられる。
- イ 尾二ノ丸御庭之図／作成年代：文政以降（徳川美術館所蔵）（図1-2）
文政期の庭園を描いた詳細な絵図であり、二度の大きな修正が認められる。

(2) 古写真

- ア 第14代藩主慶勝によって撮影された写真。余芳に関する写真は1枚確認されている。（徳川林政史研究所所蔵）（写真1-1）



図 1-1 『御城御庭絵図』
（名古屋市蓬左文庫所蔵）

写真 1-1 二之丸御庭の御茶屋
（徳川林政史研究所所蔵）

図 1-2 『尾二ノ丸御庭之図』
（徳川美術館所蔵）

2. 構造物

(1) 枝折戸

ア 絵図の比較検証

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』を比較した枝折戸の検証結果は、下表のとおりである。支柱は概ね同様な描き方をされているが、戸は『御城御庭絵図』には描かれているが『尾二ノ丸御庭之図』には描かれていないものもある。

園路には、余芳周辺に3種類の異なる意匠の枝折戸を設置している。二之丸庭園内で御植木屋の枝折戸だけは、扉が1枚の片開きで他は両開きである。霜傑と権現山下御席の枝折戸には門柱だけではなく頭つなぎの横架材がつく。張出外御席の枝折戸は、接続する板塀と同等の高さがある。植木屋と霜傑の枝折戸は、戸についてのみ緑色である。枝折戸の支柱は、飛石と飛石の間に位置するように描かれている。

表 2-1 枝折戸における『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』との比較検証結果

事項	御城御庭絵図	尾二ノ丸御庭之図
枝折戸	① 支柱は2本、戸は両開の閉じた状態で、意匠は均一な線の太さで斜め格子に描かれる	① 支柱は2本描かれるが戸は描かれない
	② 支柱は2本、戸は両開の閉じた状態で、意匠は異なる線の太さで縦格子と斜め格子に描かれる	② 支柱は2本描かれるが戸は描かれない
	③ 支柱は2本、戸は両開の閉じた状態で、意匠は異なる線の太さで縦格子と斜め格子、円に描かれる	③ 支柱は2本、戸は南側に開いた状態で、意匠は面状に描かれる
乗越石	乗越石は支柱間を跨がない表現	乗越石は支柱間を跨がない表現



図 2-1 枝折戸『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

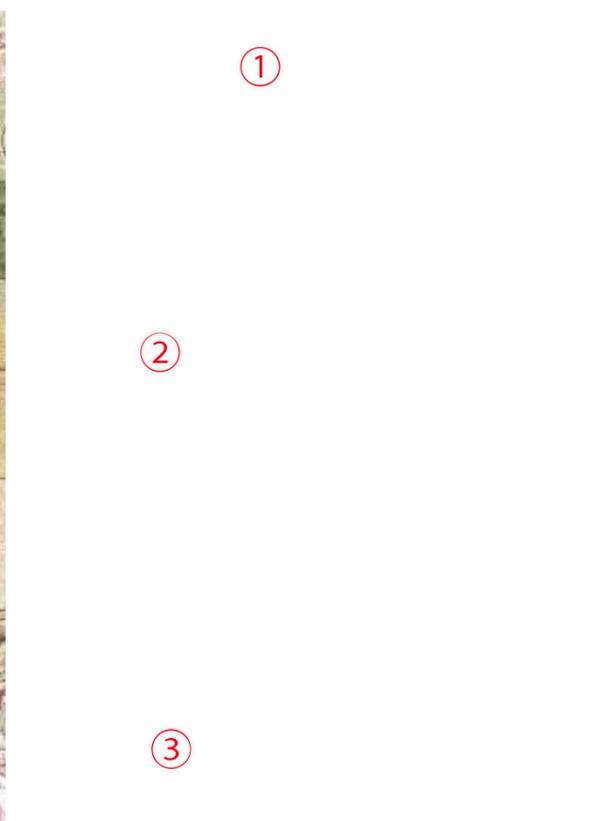


図 2-2 枝折戸『尾二ノ丸御庭之図』部分
(徳川美術館所蔵)

枝折戸と竹扉・竹垣の線の描き方について、竹扉や竹垣の線は、立子が2本線で平行に直線で描かれている一方で、枝折戸の線は、1本の太い線でゆがみ、かすれ、ぼらつきが表現され、構造の違いが見て取れる。

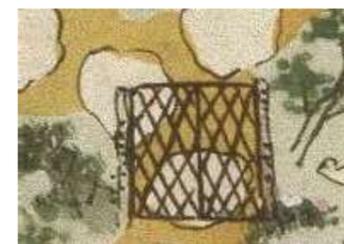
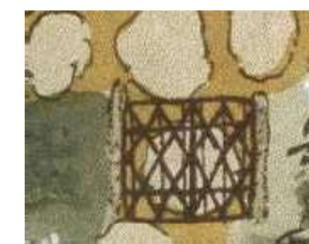


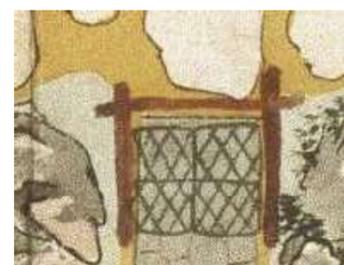
図 2-3 枝折戸 (余芳・北)



(右90度回転)
図 2-4 枝折戸 (余芳・西)



図 2-5 枝折戸 (余芳・南)



(右90度回転)
図 2-6 枝折戸 (霜傑)



(右90度回転)
図 2-7 枝折戸 (植木屋)



(左15度回転)
図 2-8 枝折戸 (張出外御席)



図 2-9 穂垣と枝折戸 (権現山下御席)

図 2-3 ~ 9 枝折戸『御城御庭絵図』部分 (名古屋市蓬左文庫所蔵)



(左90度回転)
図 2-10 竹扉 (御櫓古場)



図 2-11 竹垣 (御二階北)

イ 枝折戸の構造検討

(ア) 前回部会等までの検討済事項

- 意匠については、戸面と支柱が描かれている『御城御庭絵図』を参考とし、支柱位置については、併せて『尾二ノ丸御庭之図』も参考とし、検討する。
- 材料について根拠がないため、柱は、耐久性と調達の可能性を考慮し、檜材を使用する。
- 絵図より、戸面位置は飛石と飛石の間に配置する。
- 絵図より、戸は両開きと想定されることから、支柱間距離は120cmと設定する。また、戸に手をかける動作性より、高さは70cm以上と設定する。
- 柱は檜焼杭φ60mmとする。
- 竹材は、構造材としてマダケの丸竹を、編み付け材としてマダケの割竹を使用する。

(イ) 今回検討事項

- 枝折戸-1の割竹は、絵図と同様の本数を用いる。
- 枝折戸-1及び枝折戸-2については、絵図の支柱に点描が認められることから、表面をサビ仕上げとする。
- 支柱は安全性及び耐久性を考慮し、防腐剤を加圧注入処理した上で土中に打ち込む。



写真 2-1 サビ丸太支柱の例
(金澤邸方圓庵)

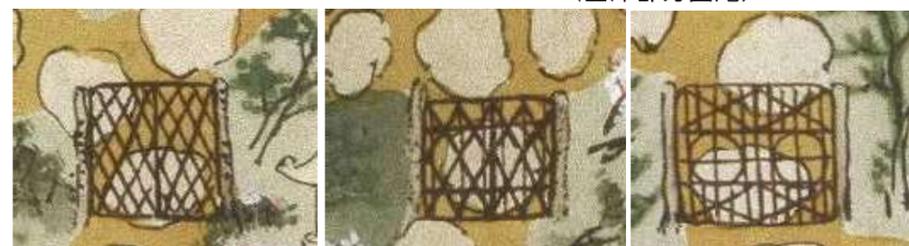
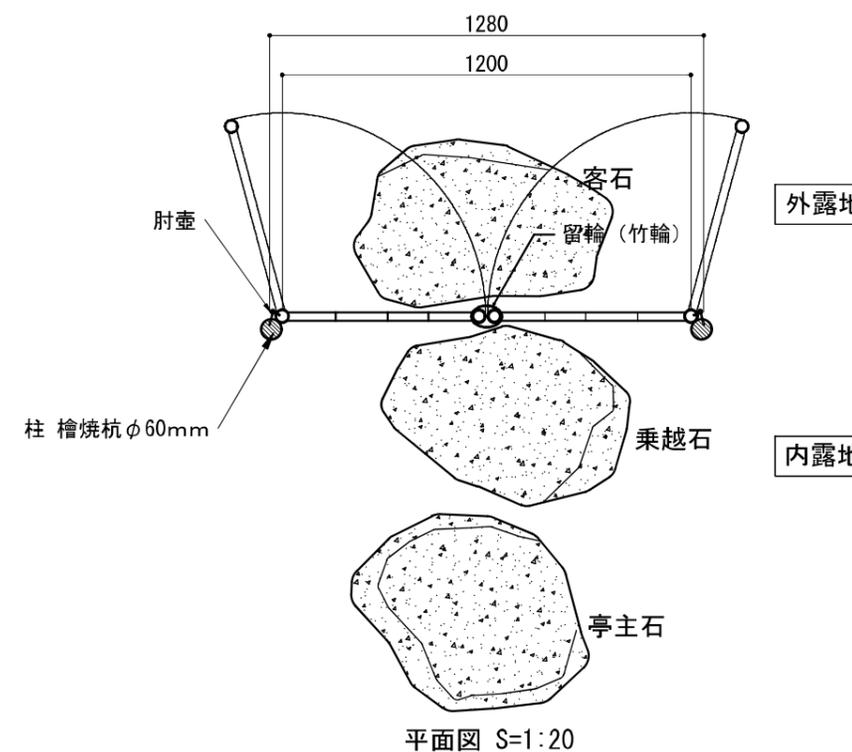


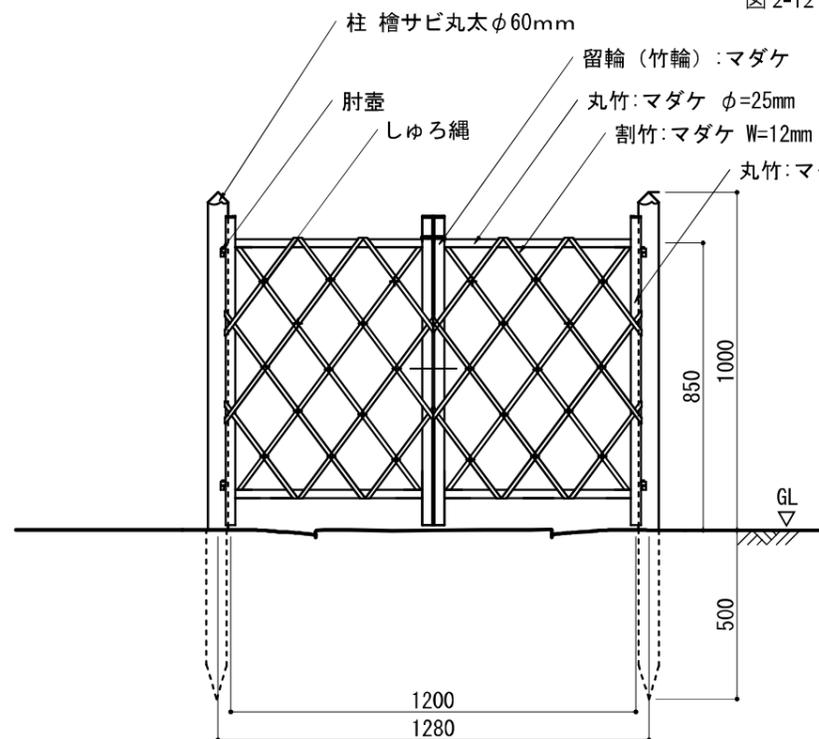
図 2-12 枝折戸 (余芳・北)

図 2-13 枝折戸 (余芳・西)

図 2-14 枝折戸 (余芳・南)

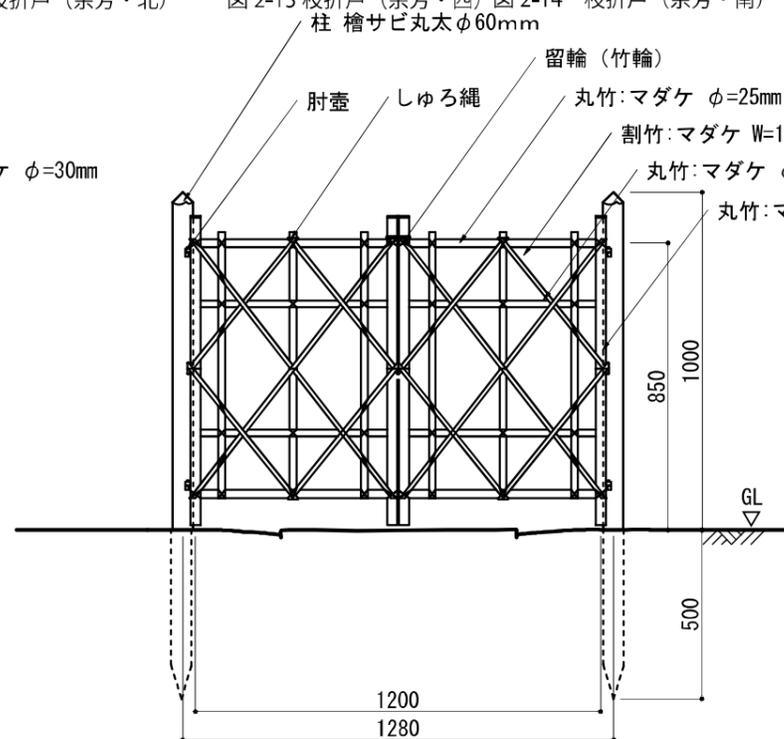


平面図 S=1:20



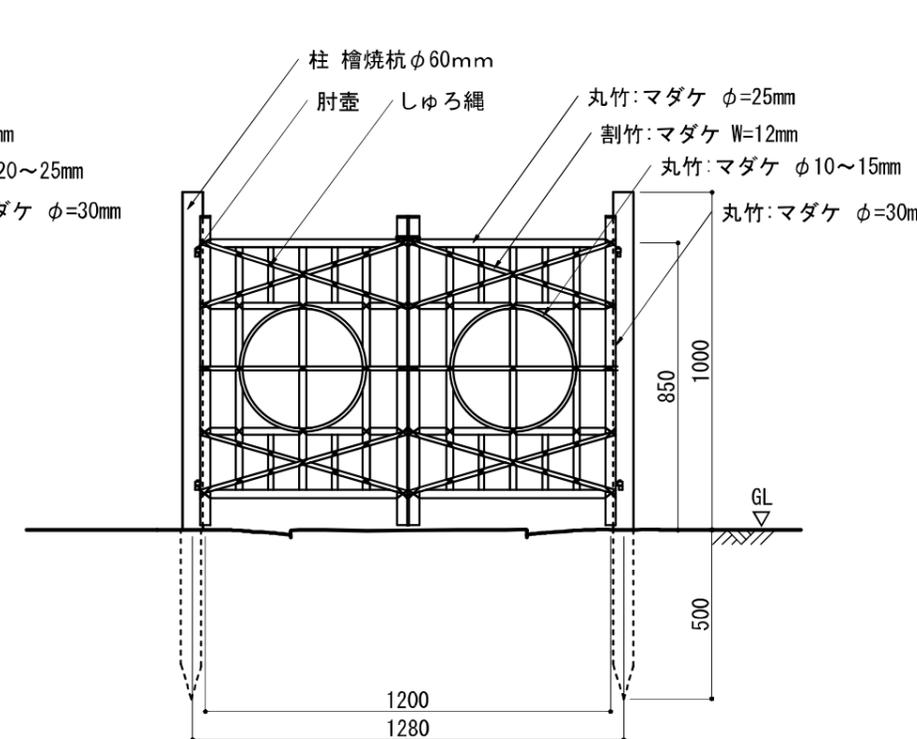
枝折戸-1

余芳枝折戸 (北) 立面図 S=1:20



枝折戸-2

余芳枝折戸 (西) 立面図 S=1:20



枝折戸-3

余芳枝折戸 (南) 立面図 S=1:20

図 2-15 枝折戸構造検討図

(2) 袖垣

ア 絵図の検証

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』を比較し、袖垣の検証結果を下表にまとめると、概ね同様の形で設置箇所も同様な描き方をされている。

表 2-2 袖垣における『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』との比較検証結果

事項	御城御庭絵図		尾二ノ丸御庭之図	
袖垣	意匠	① 立子が隙間なく立てられ、押縁が3本水平方向に描かれる。玉縁は描かれていないもの、立子の天端が揃って描かれる。	① 立子が隙間なく立てられ、押縁が2本水平方向に描かれる。玉縁は描かれていないもの、立子の天端が揃って描かれる。	
		②	②	
	寸法	① 縦と横は同様な長さで描かれる。	① 縦より横が長く描かれる。	
	② 縦より横が長く描かれる。	② 縦より横が長く描かれる。		
配置	① 建物に対して垂直に配されている。	① 同左		
	② 建物に対して斜めに配されている。	② 同左		

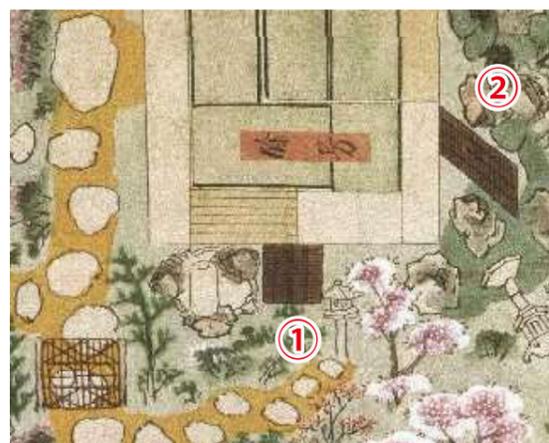


図 2-16 袖垣『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫所蔵)



図 2-17 袖垣『尾二ノ丸御庭之図』部分
(徳川美術館所蔵)

イ 絵図における袖垣の材料検証

御城御庭絵図に描かれた袖垣のうち特徴のあるものとして、円窓が設けられた霜傑の袖垣や、上部が四つ目状に組まれた植木屋の袖垣がある。これらの袖垣と余芳の袖垣を材料と垣面の構成及び押縁、玉縁の有無について比較検証し、考えられる事例を抽出する。

(ア) 材料

袖垣の材料としては、竹の幹、竹の枝(竹穂)、樹木の皮(柴)に大別される。余芳の袖垣(図 2-18)の材料は、多春園(図 2-19)や霜傑(図 2-20)と同様、線の太さが均一で平行に幅広で描かれている。一方、霜傑(図 2-24)や梅之御間(図 2-25)の袖垣は、線の太さにばらつきがあり、端部が細く描かれている。これらの異なる表現より、前者は竹幹、後者は竹穂や柴を用いていると考えられる。以下に竹幹を用いる垣を例示する。

- ・ 幹を用いるもの：建仁寺垣、木賊垣、鉄砲垣、御簾垣、松明垣、編垣、ひしぎ垣 等

立子と押縁が描かれている袖垣及び竹垣の色について検証した結果、袖垣は全て濃く描かれているが、竹垣の中には、御二階北(図 2-26)や植木屋(図 2-27)のように、色が淡く描かれているものもある。竹の種類及び加工方法については、『百垣之図』等を参考に選定する。

(イ) 垣面の構成

垣面は、竹を垂直に立て、立子として構成されている。また、立子の天端は揃って描かれている。以下に例を示す。

- ・ 竹を垂直に立て、いわゆる立子として垣面を構成するもの
：建仁寺垣(真、行)、木賊垣、清水垣、鉄砲垣 等
- ・ 束ねた竹穂を立子として垣面を構成するもの：松明垣、鉄砲垣

(ウ) 押縁、玉縁

押縁は3段描かれているが、玉縁は描かれていない。以下に例を示す。

- ・ 押縁があり、玉縁がないもの：建仁寺垣(行)、清水垣、鉄砲垣、松明垣 等

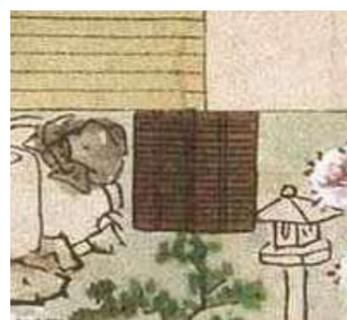


図 2-18 袖垣(余芳)



図 2-19 袖垣(多春園)

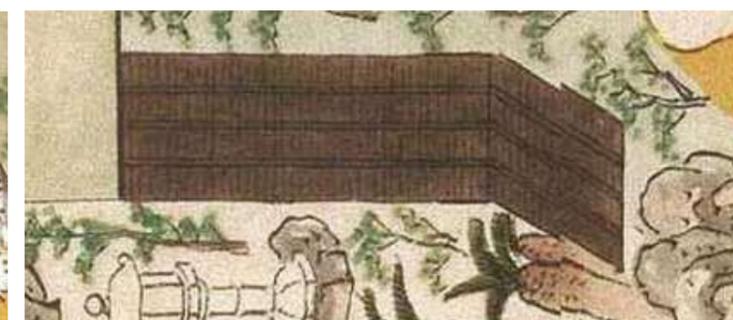


図 2-20 袖垣(霜傑)



図 2-21 袖垣(植木屋)



図 2-22 袖垣(風信)
(左 90 度回転)



図 2-23 袖垣(多春園)
(180 度回転)

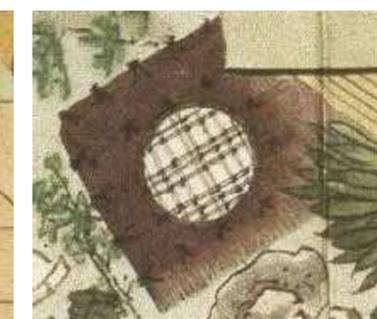


図 2-24 袖垣(霜傑)
(左 90 度回転)

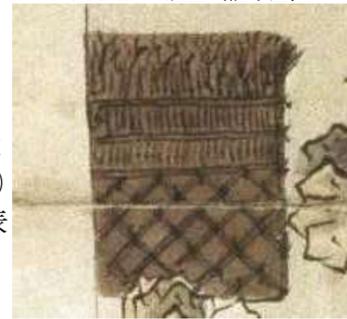


図 2-25 袖垣(梅之御間)
(右 90 度回転)

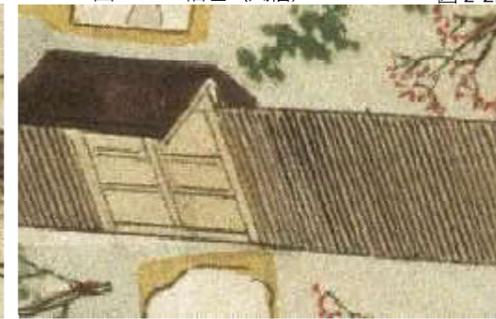


図 2-26 竹垣(御二階北)

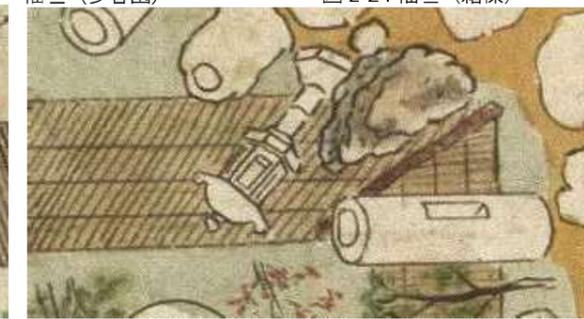


図 2-27 竹垣(植木屋)

図 2-18 ~ 27 袖垣『御城御庭絵図』部分(名古屋市蓬左文庫所蔵)

ウ 古写真の検証

余芳南側の袖垣について、古写真では認められない。

エ 袖垣の構造及び配置検討

現地にて模型（H1800×W1800）を設置し、検討した結果、下記の設計条件にて構造及び配置検討を行う。

(ア) 袖垣（南側）（写真2-2～3）

- ・幅はW=1200mm、1800mmの2案について検討を行う。（写真はW1800）
- ・絵図より図2-43のA点を起点に南北方向に配置する。

(イ) 袖垣（東側）（写真2-4～6）

- ・幅は1800mmについて検討を行う。（写真はW1800）
- ・絵図より図2-43のB点を起点に東西方向に配置する。
角度は0度、南に30度～45度で検討する。

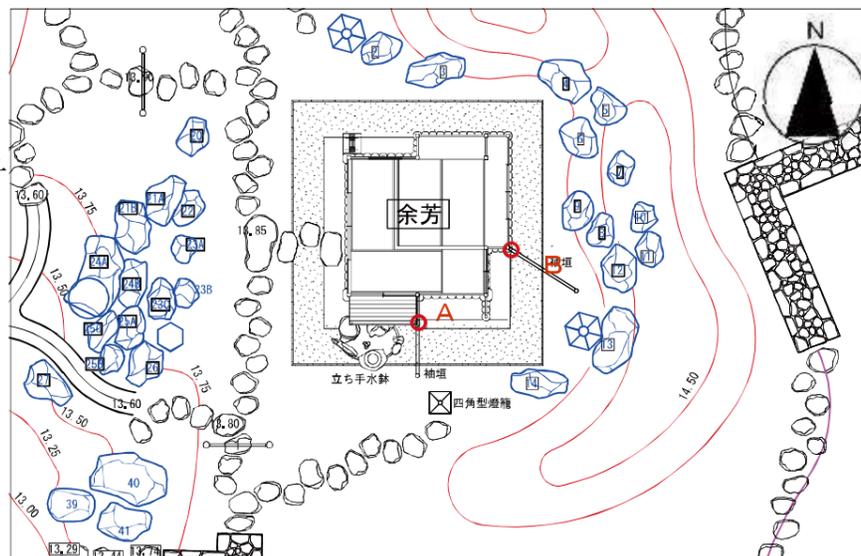


図 2-28 袖垣配置平面図 S = 1 : 150



写真2-2 袖垣（南側）実寸模型設置状況
（南側より）



写真2-3 袖垣（南側）実寸模型設置状況
（東側より）

写真 2-1 二之丸御庭の御茶屋
（徳川林政史研究所所蔵）



写真2-4 袖垣（東側）実寸模型設置状況（角度0度）
（南側より）



写真2-5 袖垣（東側）実寸模型設置状況（角度0度）
（南東側より）



写真2-6 袖垣（東側）実寸模型設置状況（角度45度）
（南東側より）

オ 袖垣の構造検討

(ア) 前回部会等までの検討済事項

- ・ 袖垣は、竹幹を立子として垣面を構成し、押縁があり玉縁がない建仁寺垣（行）で、構造を検討する。
- ・ 配置について、東側は、余芳の中央の柱から南東方向に、南側は、余芳の中央の柱から南方向に配置する。
- ・ 親柱は檜錆丸太φ120内外とし、押縁は半割竹W60内外、立子は割竹W40内外の両面張りとする。また、腐食防止のため立子は差し石の上に設置する。
- ・ 袖垣の構造について、南側はH1,200×W1,200、東側は、H1,800×W1,800とする。

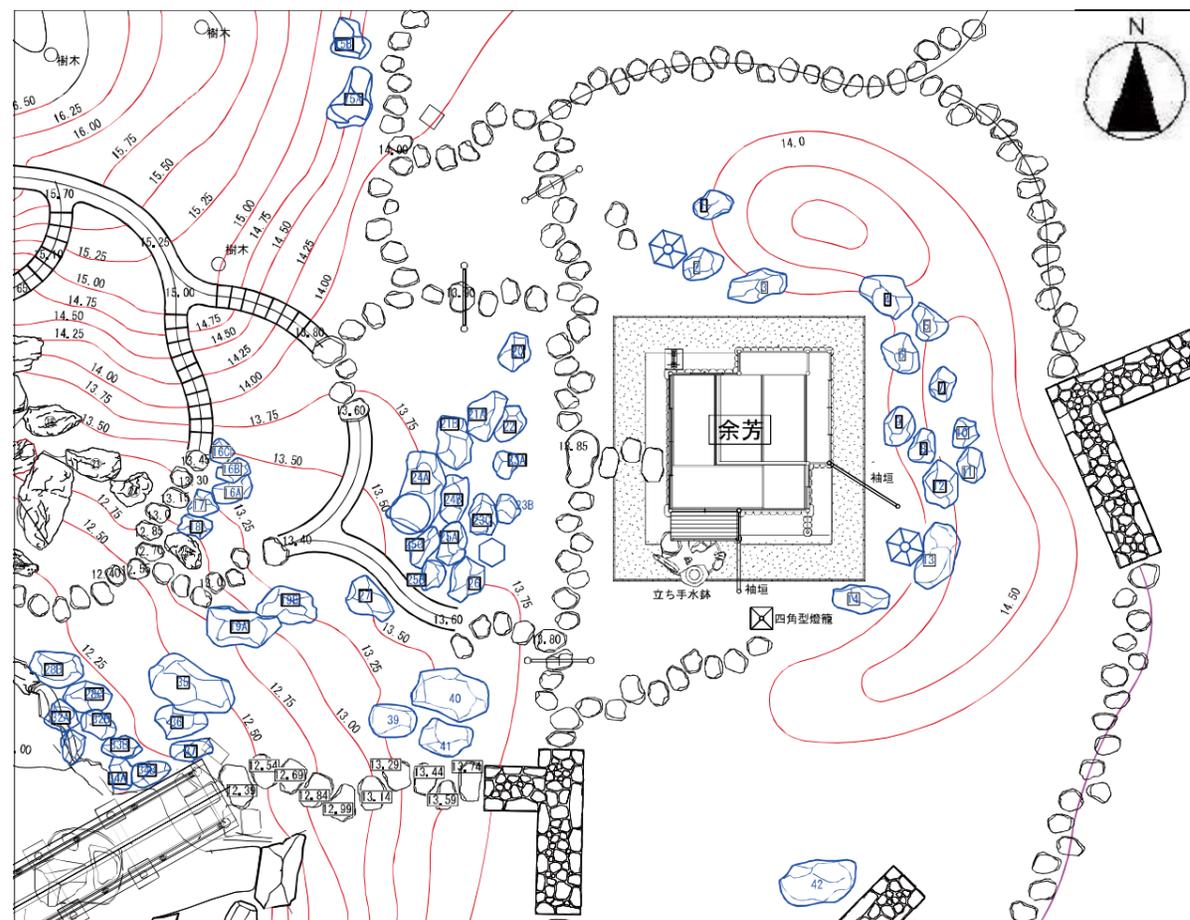


図 2-29 袖垣配置平面図 S = 1 : 150

写真 2-7 二之丸御庭の御茶屋
(徳川林政史研究所蔵)



図 2-30 袖垣『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫蔵)

図 2-31 袖垣『尾二ノ丸御庭之図』
部分 (徳川美術館蔵)

(イ) 今回検討事項

- ・支柱は安全性及び耐久性を考慮し、防腐剤を加圧注入処理した上で土中に打ち込む。

(ウ) 親柱の設置方法検討

- ・親柱について、庭側は土中に打ち込みとする。余芳建物側について、袖垣-1（南側）は葛石の上に直置きとし、振れ止めとして柱を縁に取り付ける。袖垣-2（東側）は、タキをコア抜きし、土中に打ち込みとする。

○さや管設置の検討

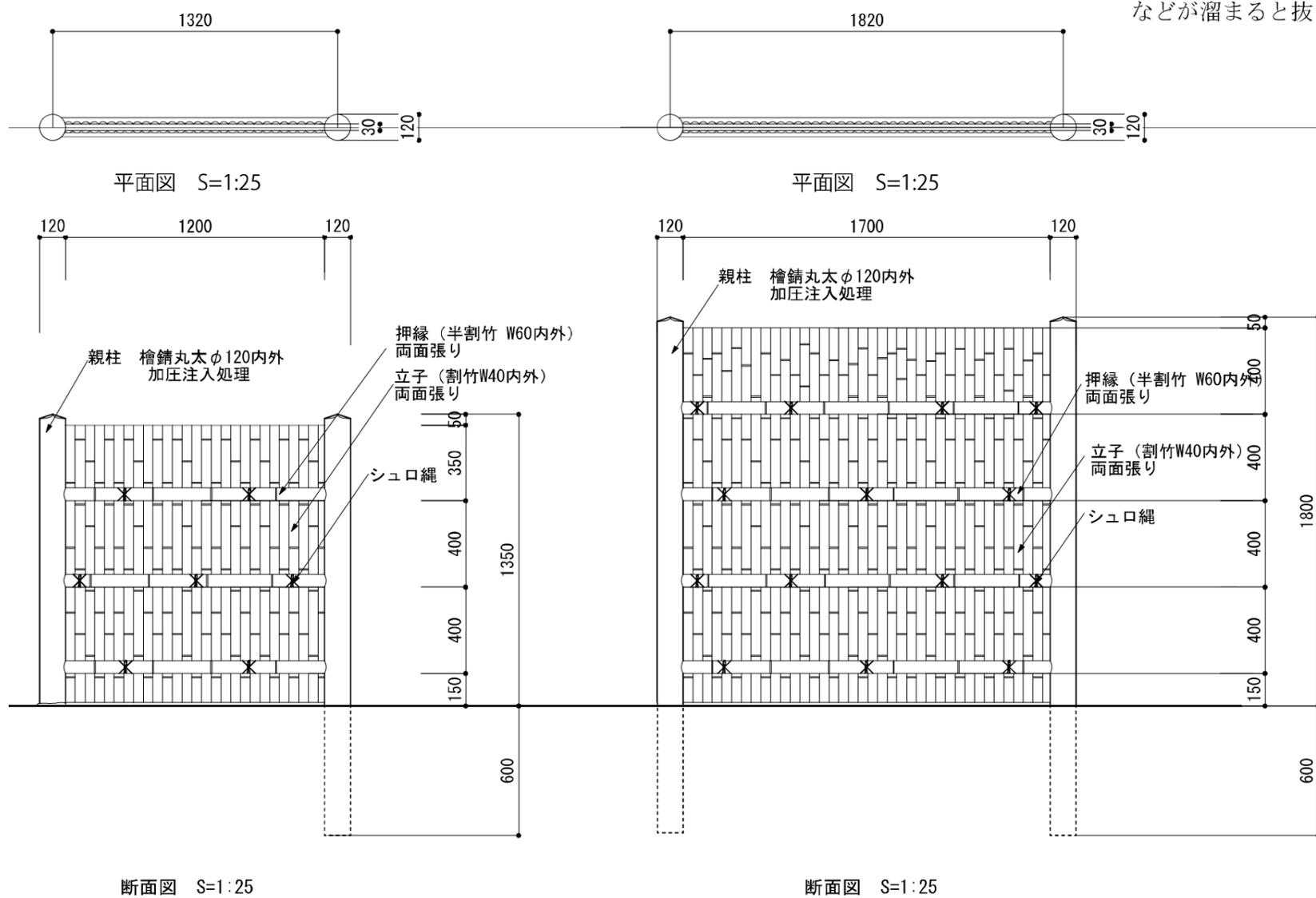
<利点>

差し込み式であることから、柱の取り換えが容易に行える。

<欠点>

底面に設け水が滞水しないよう水抜き穴を設ける等対策を講じたとしても、経年変化でゴミや砂が堆積し水が溜まりやすくなり親柱が腐食し易くなる。

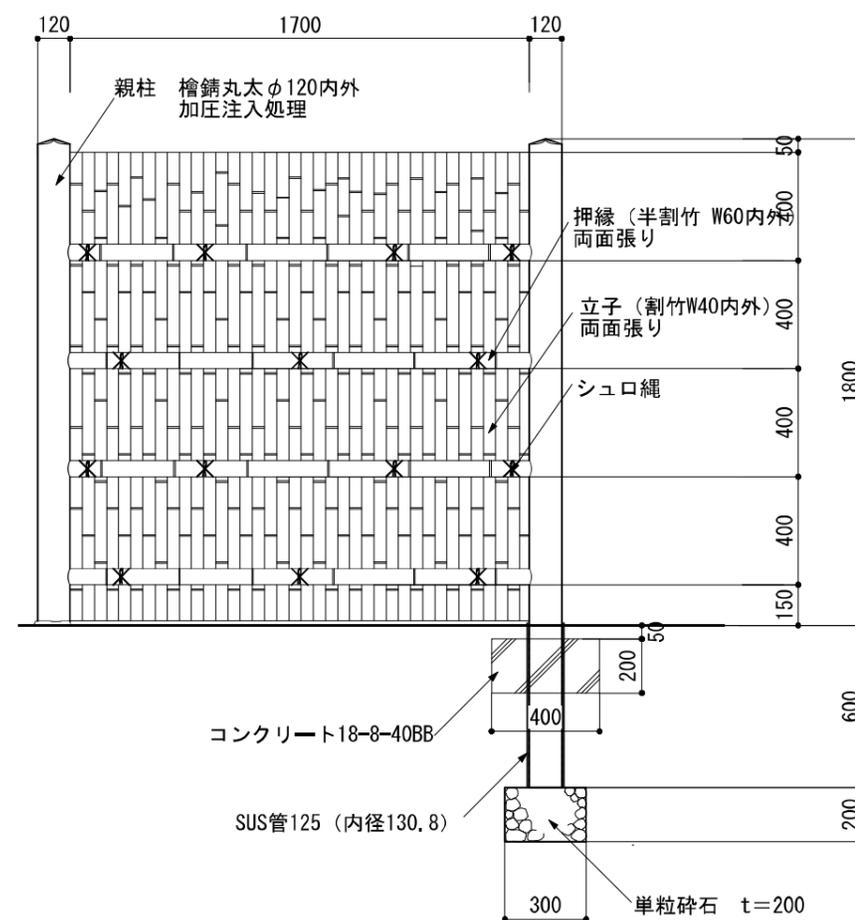
親柱のぐらつき対策としてさや管と支柱の隙間を小さくする必要があるが、隙間に砂などが溜まると抜き差しが困難になる。



<余芳南側>

<余芳東側>

図 2-32 袖垣構造検討図（南側・東側）



断面図 S=1:25

図 2-33 袖垣親柱構造検討図

3 州浜状遺構

(1) 絵図の比較検証

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』を比較し、州浜状遺構の検証結果を下表のようにまとめた。その結果、表現方法に違いがあることがわかった。

表 3-1 州浜状遺構における『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』との比較検証結果

事項	御城御庭絵図		尾二ノ丸御庭之図	
州浜状遺構	①②	単色で着色の表現	①②	黒線での境界や複数色、もしくは濃淡で着色の表現
	③	飛石や石組を表現	③	同左



図 3-1 州浜状遺構 『御城御庭絵図』部分 (名古屋市蓬左文庫所蔵)



図 3-2 州浜状遺構 『尾二ノ丸御庭之図』部分 (徳川美術館所蔵)

(2) 発掘調査結果と絵図との比較

『御城御庭絵図』と発掘調査結果を比較し、州浜状遺構に関する検証結果を下表のようにまとめた。その結果、護岸が階段状である等違いはあるが絵図は庭園の実態を概ね反映しているものと考えた。

表 3-2 州浜状遺構における『御城御庭絵図』と発掘調査結果との比較検証結果

事項	州浜状遺構
絵図	・飛石や石組が含まれ、タタキ護岸1段 ・護岸の3石の間で形成
検出遺構	・石材と階段状のタタキ護岸2段 ・傾斜部に円礫が敷き詰められている ・護岸の3石の間で形成 (うち2石は抜き取り痕)

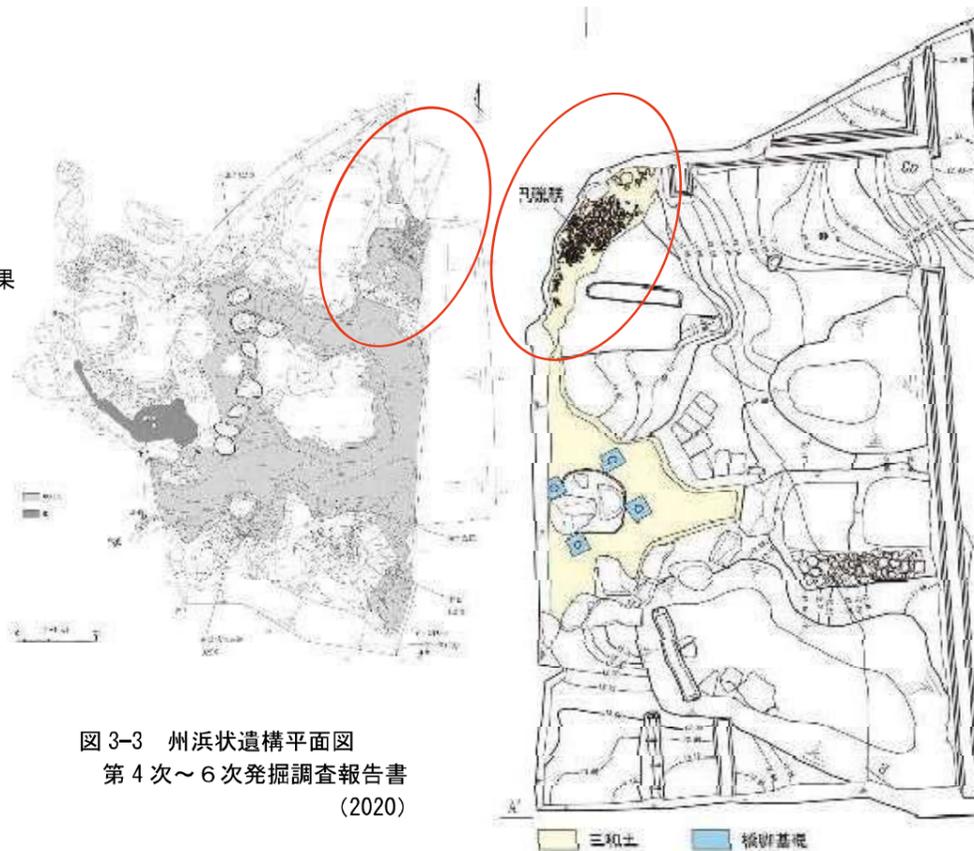


図 3-3 州浜状遺構平面図
第4次～6次発掘調査報告書
(2020)



図 3-5 州浜状遺構 オルソ画像 (合成・部分)

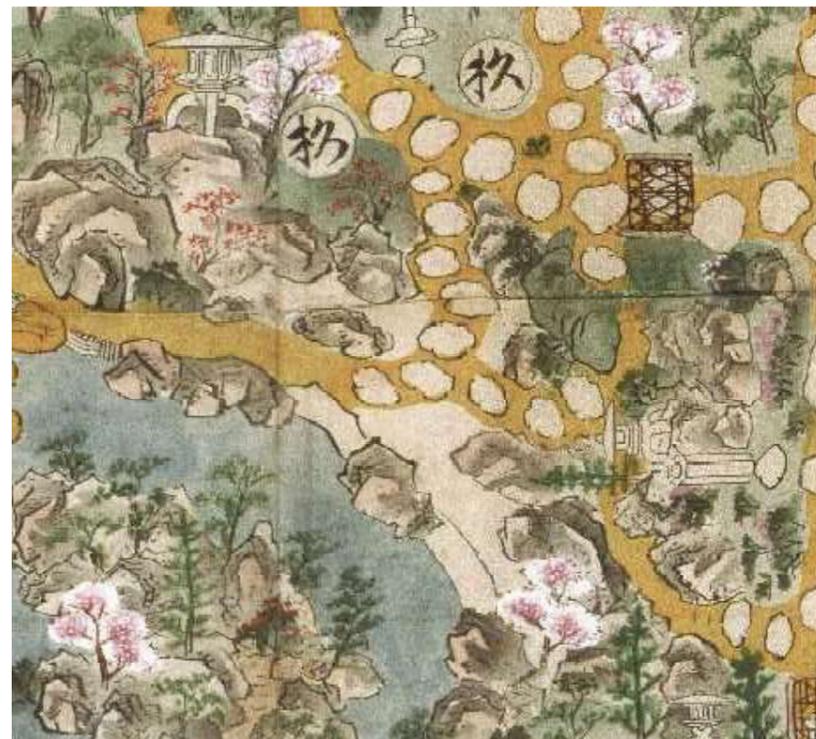


図 3-6 州浜状遺構 『御城御庭絵図』部分 (名古屋市蓬左文庫所蔵)

図 3-4 州浜状遺構平面図 (部分)
第1次～3次発掘調査報告書
(2017)



写真 3-1 北園池東側の州浜状遺構
(発掘調査後東側より撮影)



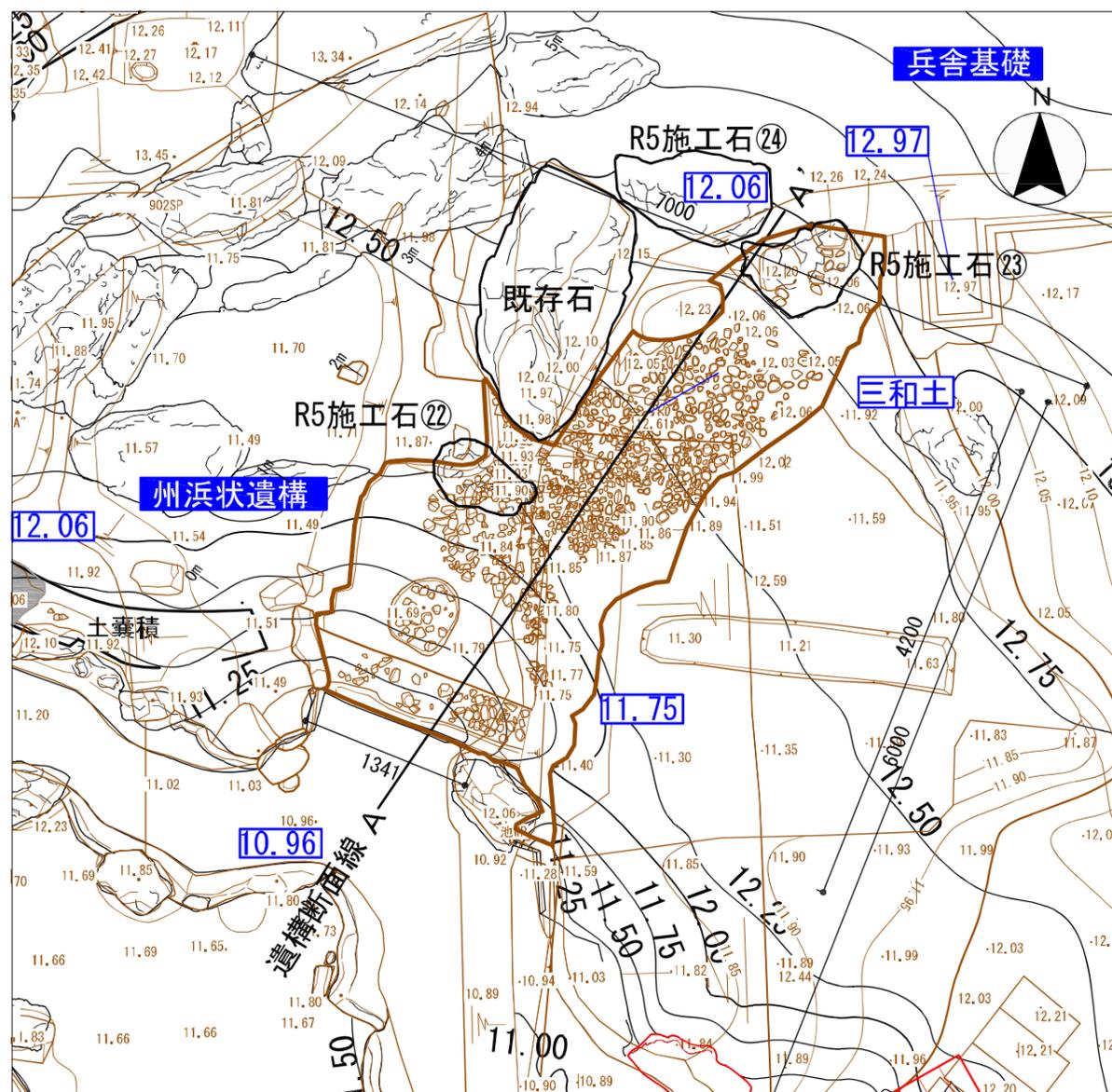
写真 3-2 北園池東側の州浜状遺構
(発掘調査後南側より撮影)

(3) 州浜状遺構の構造検討

ア 現況

- ・州浜状遺構は権現山の裾に位置し、近傍に石組が復元されている（令和5年度施工済）。
- ・遺構が検出されたタタキ護岸部は露出保存されている。
- ・遺構が検出されたタタキ礫敷き部は保護層を設けて保存されており、既存石は保護層の上に設置されている。
- ・州浜状遺構際の護岸石2石が取り外されている。

平面図 S=1:50



州浜状遺構写真（東側より）（2025.01.28撮影）



州浜状遺構写真（東側より）（2025.01.28撮影）



州浜状遺構写真（南側より）



州浜状遺構写真（西側より）（2025.01.28撮影）



州浜状遺構写真（南側より）（2025.01.28撮影）



州浜状遺構写真（南東側より）（2025.01.28撮影）

イ 修理方針

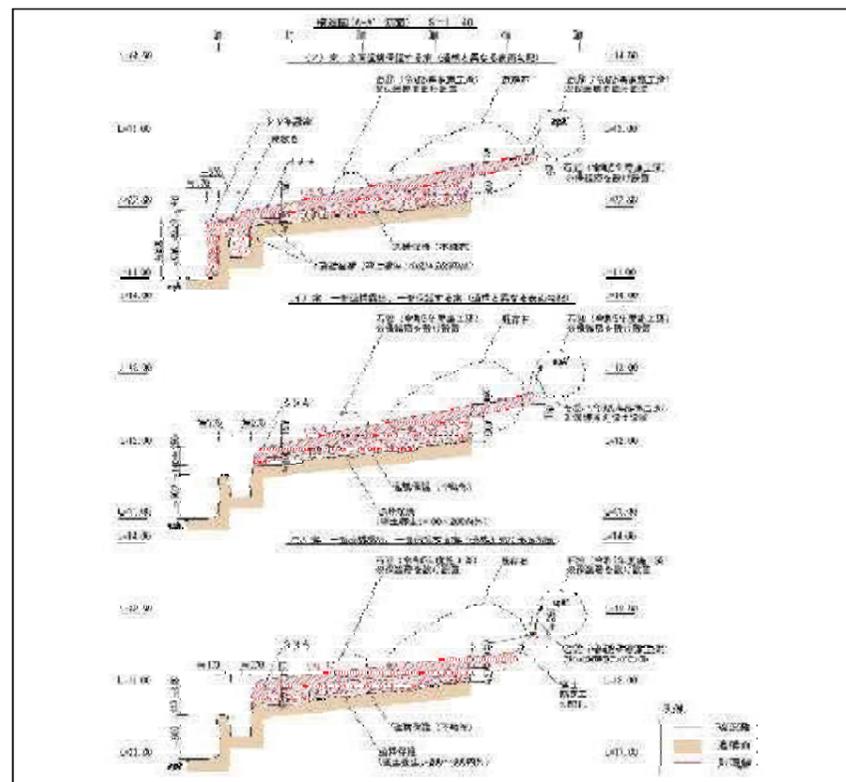
遺構の一部（タタキ護岸部）を露出させる。権現山側は周辺の景石等の現況地盤面に盛土にてすりつけ、タタキ遺構面を保護した上で、飛石を打つ。

ウ 修理方法

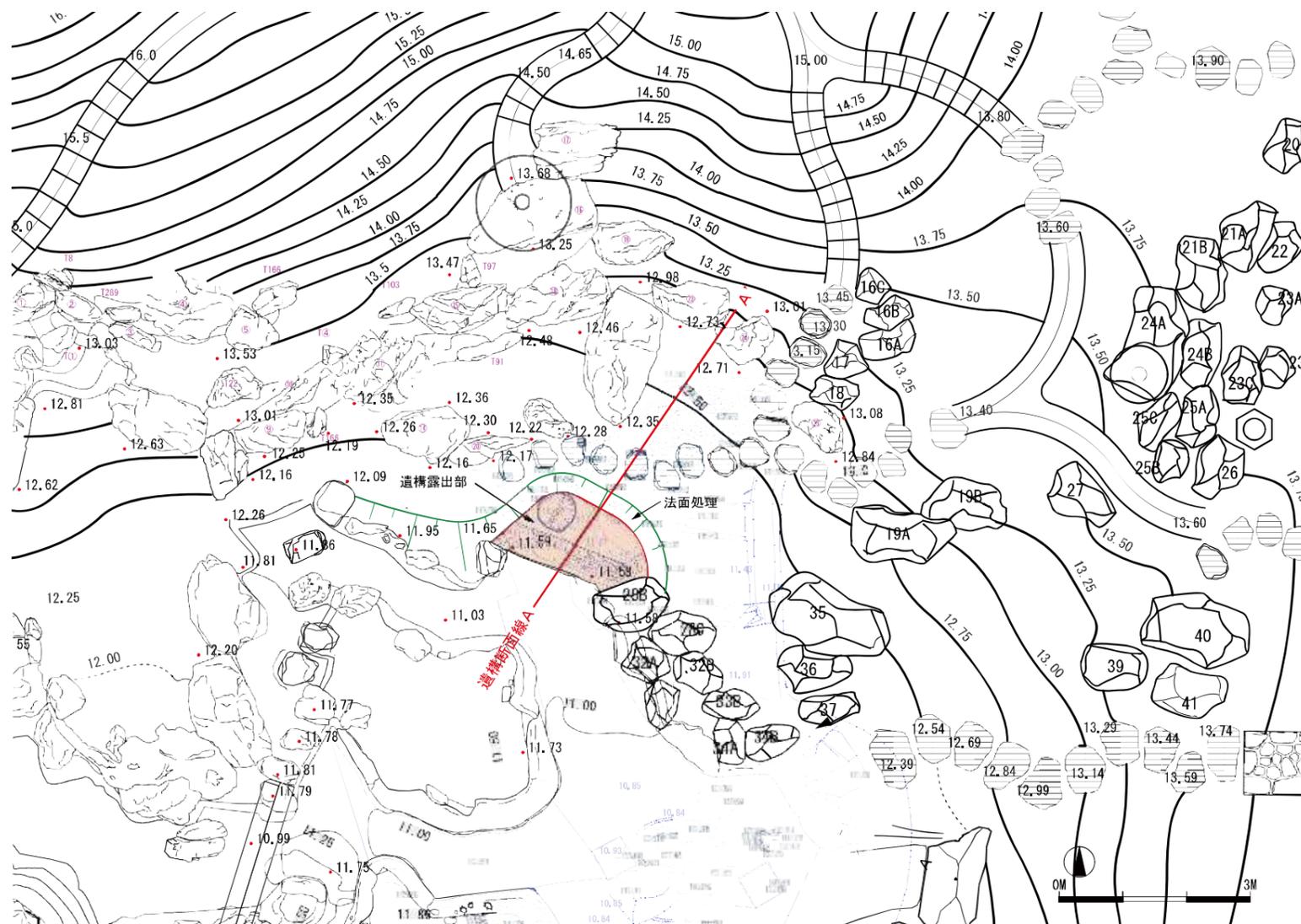
- ・遺構面は保護盛土で養生する。
- ・保護盛土の法面勾配は1：1とし、周辺の景石等の現状地盤面にすりつける。
- ・飛石部の盛土厚は遺構面より $t=100$ 以上確保する。

エ（参考）前回部会等までの検討済事項

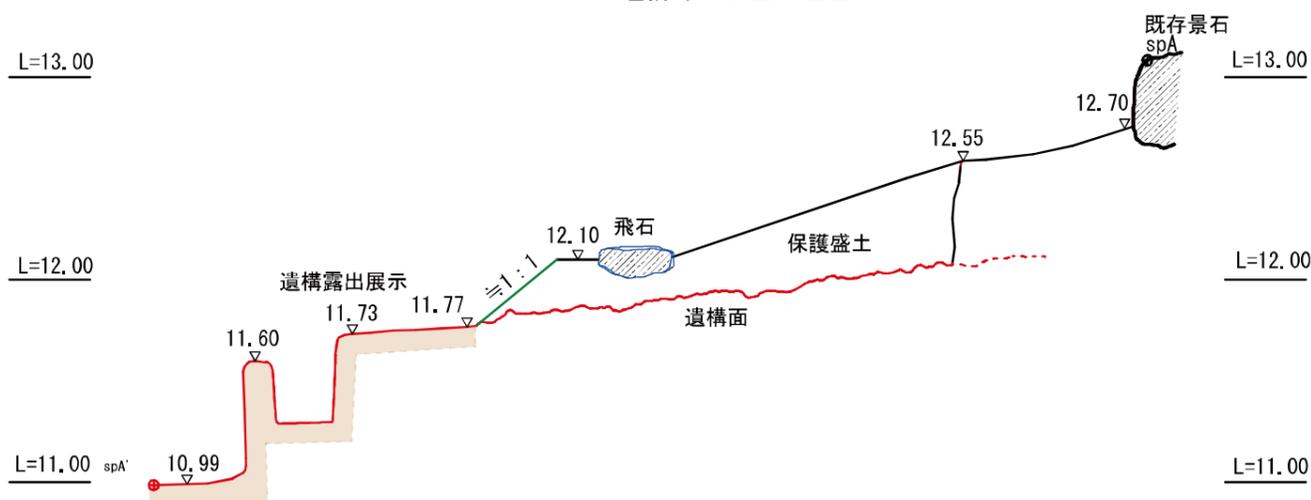
- ・第12次発掘調査の結果、タタキ1段目と2段目の間の槽は、水生植物の水鉢の痕跡と想定される。また、タタキ坑は飛石の抜き取り痕で、タタキ施工時からあったと考えられる。一方、礫敷は、近代に構築された遺構であることがわかった。
- ・以上の発掘調査結果より、タタキ1段目と2段目の一部を露出させ、それ以外は覆土し遺構を保護する。覆土厚は近接する現況石組の高さにすりつける設定で検討する。



（参考）第40回庭園部会 提示案

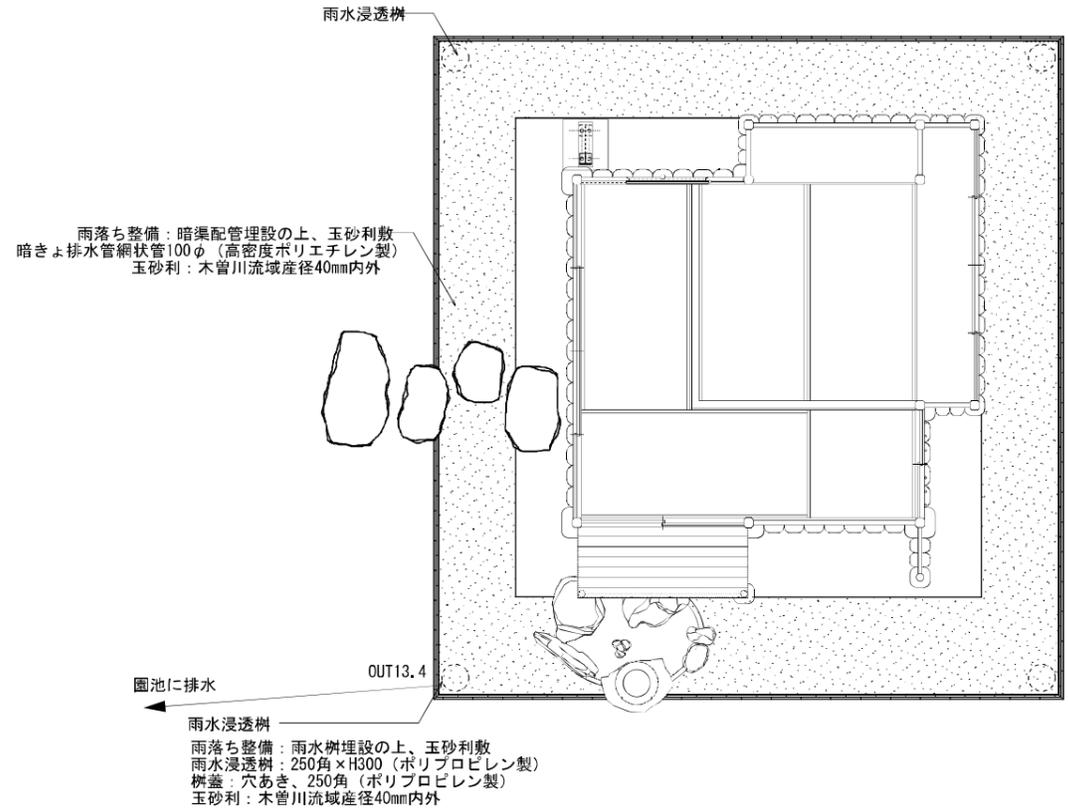
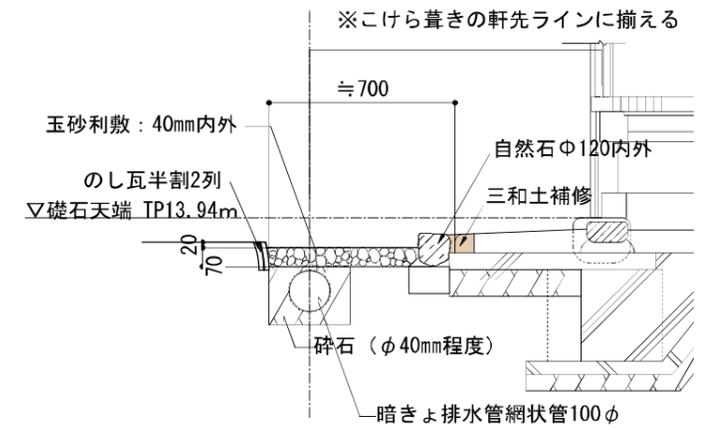
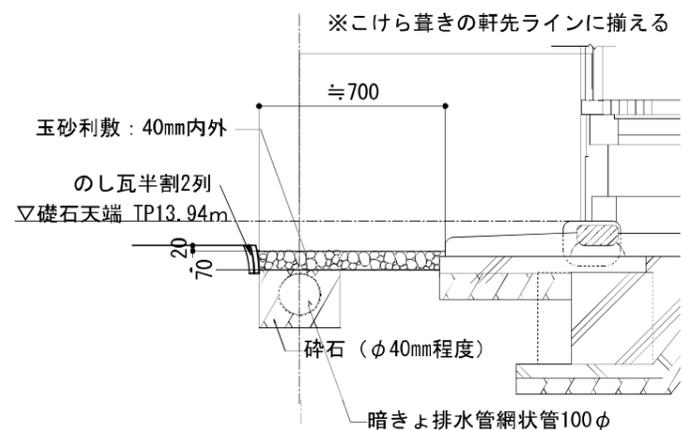
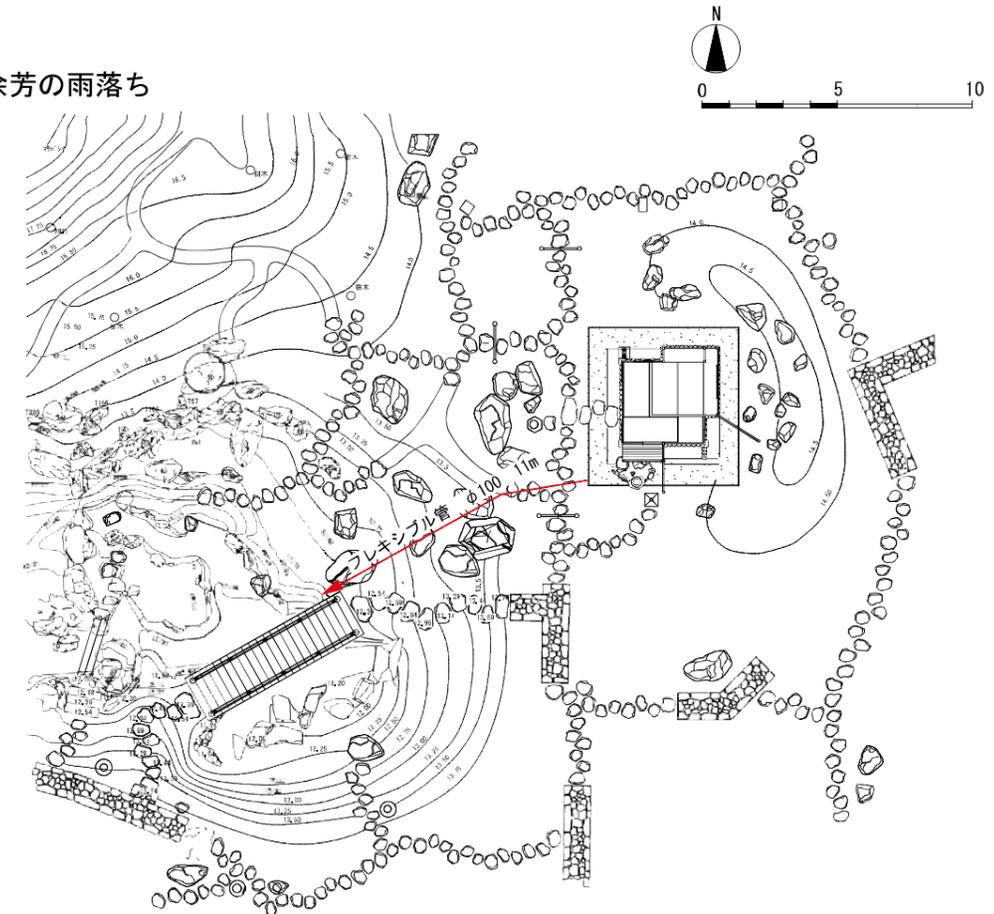


州浜状遺構部 計画平面図



（エ）案 A-A' 州浜状遺構部 断面図

4 余芳の雨落ち



樹木管理平面図 縮尺1/250 (A1)

5 植栽の修復整備について

現状の二之丸庭園の植栽は、生長し過ぎて周辺の樹木を被圧している樹木や石組等に影響を及ぼしている樹木がある。名勝庭園として樹木の健全な生育を促すため、以下の方針に基づき、3か年計画で除伐及び維持管理の剪定を実施する。

なお、権現山東部の平成27(2015)年補植樹木については樹形を作るための骨格剪定を行う。

- ア 周囲の樹木を被圧し、生育を阻害している樹木
クスノキ、クロガネモチ
- イ 石組(積)護岸に接近し、護岸を破損する恐れのある樹木
クロガネモチ、ムクノキ、モミジ
- ウ 樹木同士の間隔が短く生育が競合する樹木
ヒノキ、クロガネモチ、ムクノキ、マキ
- エ 半枯死状態にある樹木
モミジ、マキ
- オ 生育状況から2本立ちを1本立ちにする樹木
ムクノキ、タラヨウ

除伐樹木一覧

No.	樹種名	樹高m	幹周m	枝張m	要因	除伐年度
1	ムクノキ	11.0	1.9	10.0	ア	8年度
2	ムクノキ	10.0	1.8	7.0	イ	8年度
3	イヌマキ	5.0	0.5	1.5	エ	8年度
4	クロガネモチ	10.0	1.2	0.4	イ	8年度
5	ムクノキ	9.5	1.2	12.0	オ	8年度
6	クロガネモチ	7.5	1.4	7.0	ア	8年度
7	クロガネモチ	5.5	0.6	3.5	ア	8年度
8	クロガネモチ	7.0	0.6	4.0	ア	8年度
9	モミジ	13.0	1.7	10.0	エ	8年度
10	モミジ	10.0	1.0	4.0	イ	8年度
11	クロガネモチ	9.5	1.0	6.0	ウ	8年度
12	ヒノキ	9.5	0.5	2.0	ウ	7年度
13	クロガネモチ	4.5	0.7	2.2	イ	7年度
14	クロガネモチ	7.5	0.8	8.0	ア	7年度
15	クスノキ	16.0	1.8	12.0	ア	9年度
16	タラヨウ	5.0	0.7	3.5	オ	7年度
17	クスノキ	15.0	2.4	18.0	ア	9年度
18	クロガネモチ	5.0	0.7	4.0	ウ	9年度
19	ラカンマキ	3.5	0.4	1.0	ウ	9年度
20	ラカンマキ	3.5	0.5	2.5	ウ	9年度

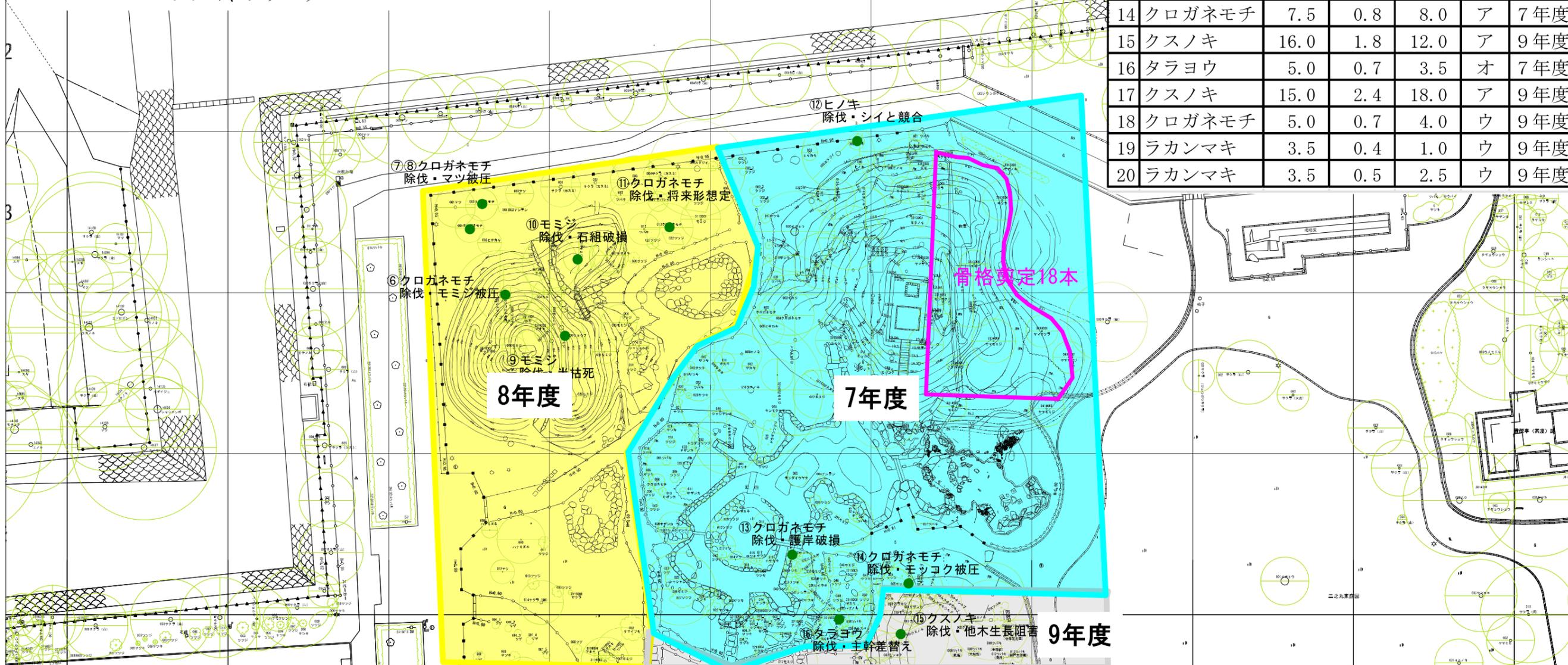


図1 除伐対象樹木位置図(北部)

樹木管理平面図 縮尺1/250(A1)

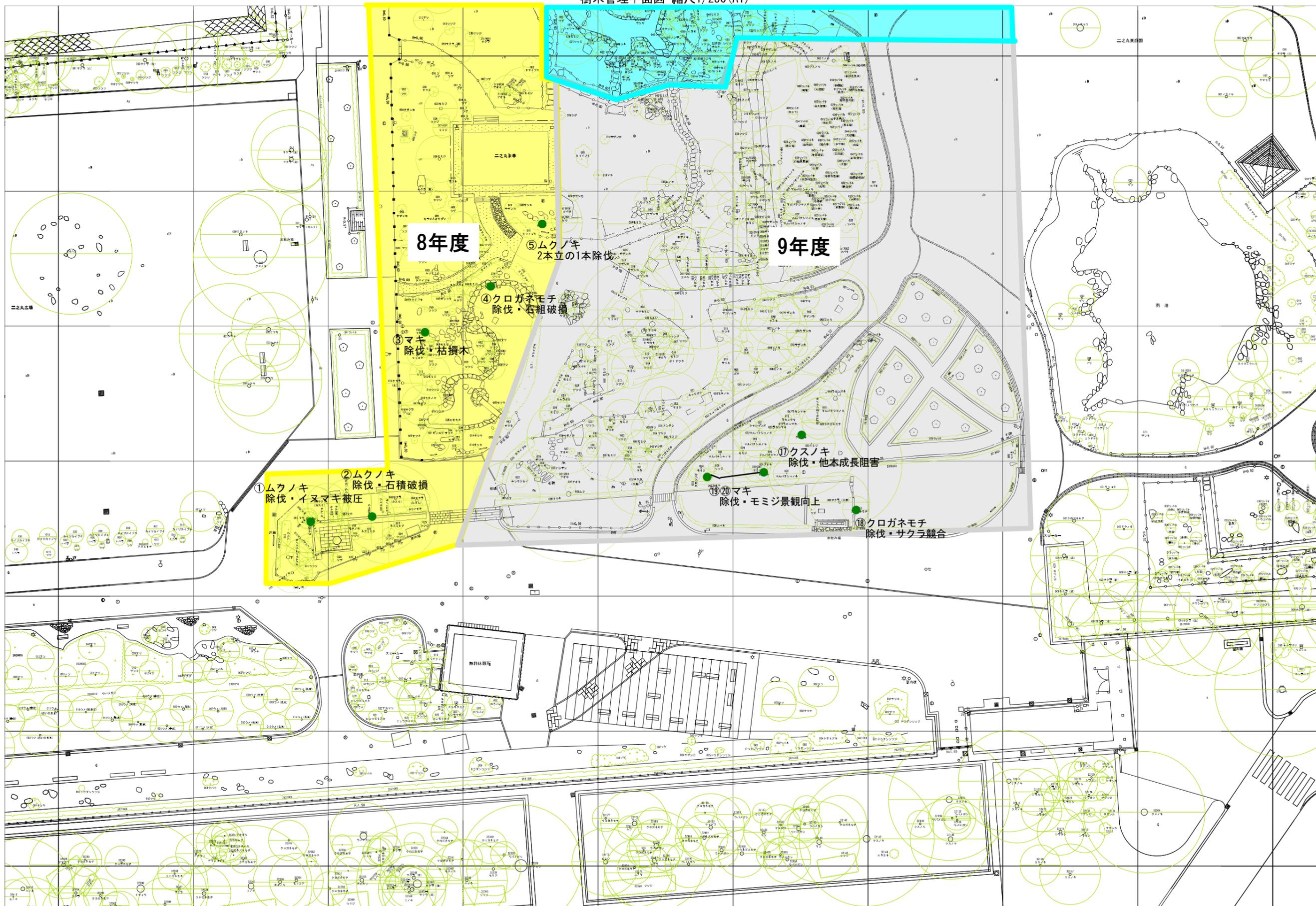


図2 除伐対象樹木位置図(南部)

除伐樹木写真



①ムクノキ



②ムクノキ



⑦クロガネモチ



⑧クロガネモチ



③イヌマキ



④クロガネモチ



⑨モミジ



⑩モミジ



⑤ムクノキ



⑥クロガネモチ



⑪クロガネモチ



⑫ヒノキ

除伐樹木写真



⑬クロガネモチ



⑭クロガネモチ



⑲ラカンマキ



⑳ラカンマキ



⑮クスノキ



⑯タラヨウ



⑰クスノキ



⑱クロガネモチ